

「心の絆」への詩（うた）

— フランス元首相の平和への思いと共に —

杉 山 朱 実

はじめに

2015年1月9日。現地バリ時間で、“風刺画新聞社”へのテロ行為があり、17人がなくなった。風刺画新聞は、もともと“フランス人のエスプリ”で、フランス政府自身やカトリックの神父たちへの、“笑い話し”も多いものであったが、しかし、今の世界、フランスでさえも、それを以前のように“フランス人独特のユーモアのエスプリ”と、とらえる余裕が、政府側にも、テロリスト側にも、一般庶民にも、ヨーロッパ全体の人々にも、アラブ系のひとびとにも、人生への余裕のない、目先の生活に目いっぱい時代となってしまったのだろう。1月11日には「追悼集会」があり、ドイツのメルケル首相、イギリスのキャメロン首相とともに、最前列で、イスラエルのメタニエフ首相と、パレスチナのアッバス議長が4人を挟んで、同じく腕を組み、「テロへの抗議デモ」に参加していた。イスラエルとパレスチナが、「古（いにしえ）の時代」のように、平和への団結へたどりつく、希望があってほしいと願い、第二次大戦中、ユダヤの人達を助けるために、パスポートを発行し続けた日本の駐在外務省の方や、民間で薬品を送り続けている、日本の個人の善意等、欧米とは違った、日本だからこそ、信頼されている今こそ、彼らを唯一、助けられる「心の絆」が、日本のみには存在し、「彼らの団結の希望と和平」を、日本が実現する架け橋になってもらいたいと説に願っている。ありしも、1月17日（神戸の震災から20年の今日、天皇・皇后両陛下参列の記念祭が、あったが）安部首相は夫人と共に、エジプトへ行き、中東への資金援助を表明していた。「心の絆」も、望みたい。

1. フランスの元首相、ドミニク・ド・ヴィルバン氏の「平和への思い」

彼は首相時代の二年間をかけて、毎夜、エリゼ宮で「テロ」は教育と詩歌によって、解決できる一つの方法であると、強く願っていた。その集大成が彼の著書『眠れぬ館』である。

キーワード：心の絆、国際平和、戦争、ド・ヴィルバン元首相

日本語読者へ向けての特別な寄稿から「平和への絆」を読み取ってもらいたい。

眠れぬ館 (日本の読者に寄せて)

権力の行使が生まれさせる恐怖、疑念、疲弊に、どのようにして立ちむかうのか？

私は、それは内なる作業の道により、詩人達、画家達、芸術家達と共にする「対話のこ
とば」により、現代（この時代）の痕跡を解読するために夜でもたゆまずに作業することによ
り、良心の光を夜に探しながら、目を覚まして、鮮烈な記憶の要求に従ったものであったと、
自覚していた。フランスの首相官邸である、マチニヨンの館¹が、この眠れぬ館となり、そこ
で私が（徹夜の作業に）努めたのが、2005年から2007年の二年間を費やしての日々（毎日）の
この執筆作品である。

夜との格闘の中で、私は、ポール・ツエラン²やオシップ・マンデルスタムが全体主義の殺
人犯罪の中に人間が呑み込まれていくのに対峙（たいじ）した戦う声を、我が友日本人読者達
と共にわかちあいたいと思う。大陸から引き離され、（慣れ親しんだ土地から）追放され、自
身の権利・所有を剥奪された道で芽生えた、多数（数百万人）の奴隷達の損なわれた言葉
を届けるために、エメ・セゼール³やレオポルド・セダン・サンゴール⁴と共に、ネグリチュー
ド（黒人としての自覚や黒人文化といった、黒人性）の歌を、立ち上がって聞き入れるよう
になればと⁵、私は思う。歴史の残酷さに対して言葉で戦う、重苦しい蔵書の中から記憶と戦う
ことへと導いてくれるアンセルム・キイエフェールの描写を目に浮かべてほしいと、私は望ん
でいた。

権力からのこの夜（という時間）は、人生の画像に載せて（人生のイメージ）、迷宮である。

様々な切望と同様に、様々な異種同類語で怒りをぶちまけ、リスボン通り（フランス、パリ
市内）をさまよう、ベソアと私はそこですれ違った。パズルのように、あらゆる文化を描く、
そして、その中心に我々の怪物を閉じ込めようとする、この迷宮の無限の道筋を、私は、つな
ぎ合わせたいと望んだ。希望と同様に虐殺や叫び声の迷宮は、ボルケスやクリスチアン・ドー

¹ フランスでは、「マチニヨンの館」(Hôtel Matignon) といえ、首相官邸を示すが、そこから、この本の題名を、“Matignon” の部分を派生させ『眠れぬ館』(Hôtel de l'Insomnie) を考え付き、この本の題名としたと、直接、ド・ビルバン元首相から伺っている。

² ポール・ツエラン：(1920-70) ルーマニア生まれのユダヤ系ドイツ語詩人。強制収容所体験とユダヤ神秘思想をもとに、独自の詩境を開拓する。本名、Paul Antschel.

³ エメ・セゼール：(1913-2008) フランス領マルニティック島生まれの作家・政治家。シュレーアリズム、反植民地主義の立場から、詩や戯曲を創作する。

⁴ レオポルド・セダン・サンゴール：(1906-2001) アフリカ、セネガルの初代大統領（1960-80）、詩人。（セネガルは旧フランス領）

⁵ 「立ち上がって歌を聴く」とは、西洋での音楽鑑賞での最高の賛辞の態度である。

トウルモンやロートレアモン⁶といった友人達の言葉に宿されている。

詩を通して私が着手した、自身のこの探求は、極力に対峙（たいじ）する人生の証（あかし）であり、それぞれの人の生涯を通じての可能な道筋を示すガイド（案内人）でもあるが、

それは、過去の世代の人が天分として我々に残してくれた色や調和や言葉の豊かさをよりどころとし、そして、我々人類の宝を形成する。

（2014年6月寄稿を頂戴する）

2. パレスチナの詩人ダルウィッチとの絆

フランスでパレスチナ人の詩人ダルウィッチと出会ったド・ヴィルパン元首相は、彼の詩歌をとおしての「平和への祈り」を数多く取り上げている。

その一部を取り上げ、平和へのメッセージを考えてみたい。

フランス語原文には、「表題」は、書いてないが、内容把握のため、杉山が添付した。

「前書き」

ここ、ヴァレンヌ通り（エリゼ宮のあるフランス大統領府）では、時間給の労働者達が通り過ぎていく。しかし、彼らが、ほとんど感情をあらわにすることはない。なぜなら、ここが長時間労働から解放され、日付のない登録簿から僅かな一部一時金支払いを受け取る場所であるからである。

ミノタウロス（ギリシャ神話の牛頭人身の怪物）と向き合って、インクと紙で紡ぎだす、この一筋の糸のような繋がりが、岬を越えるように困難な限界を超える私の助けとなってくれた。紙の一枚一枚に、私は肩の荷が軽くなり、解き放たれるのを望んだ。苦難が自由へのチャンスと成りうるべき時、人の心に良心への変化が起こるまで、前へと進む強さを見出すために自分自身を掘り下げたく思う。

何か論じようとするのだけれども、常にその道程には、強硬派やキリストの十字架がある。しかし、おそらく、我々の最良の味方は、時折、貧しい境遇の天命なのである。

真夜中に、孤独が碎かれるのは、我々自身の戦いのために武器と同様の言葉を我々に与えてくれる、生きる指標を定めてくれる、軍隊の前線で生活を切り開いて初めて手を染める、世間から隠れた人目を避けた仲間たち、志願した仲間達の恩恵のおかげである。彼らに続いて、す

⁶ ロートレアモン：(1846-70) 詩人、「マルドロールの歌」の作者であり、シュレアリズムの先駆者とされる。本名 (le comte) De Isidore Ducasse 伯爵。

すべての沿岸住民が新たな地平線の領域への襲撃に、そそり立つ。そして朝には、奇跡が繰り返される。人は目覚め、あらゆる束縛から自由となるのである。

1. (告白の時)

告白の時である。おのれ自身を成しているもの。天地の内面(状態)に地震はつきものである。政治の内面(状態)に脅威はつきものである。

今日、昨日と同じく、心が痛む。戦いは孤独である。勝利なくしての義務とあらば。匿名のゲーム(作者不詳の賭け)、波の動きが風評を培う(掻き立てる)、人間的感情に聞く耳を持たぬ(報道の)コラムニスト達が好奇心の対象として投げ込んだ残忍(残酷)なおとぎ話に。荷が重くなったり、背中に火がついたり、(荷・責務が)ずたずたに引き裂かれたりした時に、どうやって私は前進できようか? そして最も恐れるのは誰か:天使か悪魔か、魂の恐怖か人類の葛藤(人類の戦争)か?

2. (“書く”ということ)

書くこと、(それは)恐怖へのコラム(時評)ではなく、恐怖に対する私記であり、幾人かの支持者達のまなざしでより充実したものとなる、(まるで)(船のトップにある)しょう楼から、風波のうねりや、マストや(帆船の)ロープの錯綜の中で、海の渦潮と天空に目を凝らしているかの様に(である)。

私は世界を見渡す監視員達(見張り人達)、チャアーやセランと共に、ランボーやボードレルのマストを外した船と共に、セザールやワルコットやダルウィチの島々、群島、岸辺からの声と共に、始動(出発)したと思う。荒廃した世界各地の廃墟を通る道筋を切り開いて進むためにまだ多くの作家達がいる。

3. (不安の時代の魔法のことは:(古い文明の)アフリカ・インド・アマゾン)

最も大きな懸念(不安)の時代には、失われた平穏の探索(追求)から始め、最初の光を取り戻すために過去へ遡ることである。

この光、私は、子供の頃、目をくらませるほどの場所にいるという幸運に恵まれていた。モロッコから南アフリカまでである。その広大な砂漠の広がりが私の最初(はじめて)の黒いキャンパス(光景)であった。そこでは、あらゆる痕跡やあらゆる差別が消えて後を留めていない。私は一日(日中)の(複数回の)祈りと焼け付くような痛みを忘れることはなかった。私は聖なる街を夢見ていたが、そこでは書物は古くからの賢者のごとくあり、そしてそこでは男達が古い魔術書のように話している、ラクダの手の届くところの、あちら、シンゲッチでは、メッカへの巡礼者たちが集まり、そこで写本やコーランを確認し、金色の五つの球体を上に載せた、モスクのミナレット(祈りの時を告げるイスラム教寺院の高い塔)を注意深く見守る番

人がいる。

人生の偶然が私を導いてくれたのは、本当に拒まれてきたものたちであり、インドでは“サンスクリット教でバラモン教聖典”の言葉がまだいっぱいにあふれており、あるいは、さらにアフリカでは、そこではマリの帝国軍事的支配の思い出がなりひびいているのである。私は、探査されていない、あるいは、虐げられた、忘れ去られたものへと進みでていた。オレノック、あるいは、アマゾンの後で、私はまだパンタゴニアやチベットのことを夢見ていた。人間同士の、暴力、貧困、不正という、無言の戦いに立ち向かうために、私は、飽くことのない帝国支配の欲求での大陸への襲撃に、始動（出発・旅立ち）を望んだ。私にとって、追放（離れてくらすものの）の言葉は、何よりもまず、孤独にあって獲得した、内なる大地への奉公であった。私は古い文明にまるで近づいているように思えたが、そこでは、先祖伝来の過去からよみがえる恐怖を克服するために、魔法の言葉や力強い儀式が生じているのである。

この様にして人間は”藪に覆われた土地と言われる“アフリカの奥地を制御しようと（希望し）、野獣を大地に打ちのめし、人を隷属（服従）させようと力で鎮圧するのである。

4.（進もう！）

進もう！ じっとせず出発しよう！ しかし、歴史の同じ繰り返しを知らずに、いることができるのか？ もし（世間の常識、道徳などを軽蔑する態度の）キニク主義に、取り付かれていたら、もし娯楽趣味が強かったら、もし欲望の連鎖が権力をふるうのなら、それらが、我々の人生そのものの方向を時には変えてしまう。

出発間際の人間にとって、一步一步が、ほこりを搔きたて、そして、足跡を残す。

（神が人間の肉体を作った）土に、積み重なった疲労、苦勞、辛い仕事で、しわが刻まれた。

闇が、もはや、いかなる痕跡も残すことがない様に思われる、かくも、脆く崩れやすい、かくも軽くなった巡礼者の心を捉えている。地平線の未来のこの瞬間を、私は待ちわびる。

月食が月の恐れを、最初の新興に結びつけた頃の、地の果てに住む暮らしが、私は好きである。そこにいる時には、いにしえからの魂の良心の呵責が聞こえる。

5.（我、少年時代）

心には、それぞれの大地への思い出があり、その大地にも、また、それぞれの歴史がある。私の少年時代の村々のことが、私の胸を打つ。サン・ジュニイアン、シュウー、オラドゥール・シュル・グラン、そこが、私の祖母、母、看護婦達が、すざましい殺戮の後、赴いた場所である。

穴のあいた家々や黒こげになった壁の惨状を目にしたのは、私が7歳の時であった。

学校から離れて、ごったがえした場所を、私は集団児童としての旅をし、旅から旅への繰り返しであった。女性達と一緒に、集団児童達は、教会の中に集められたが、やがて、そこも焼

け野原とかした。今でも、まだ鳴り響く、「でこぼこ道を打ち鳴らす、(農民たちの履く)小さな木靴の耳障りなざわめきの音」

オラドウールの子供達、ゲルニカ (スペインの内戦の象徴)、リデイス (リビア)、あるいはヴァルソビ (サラエボの内線地) の同じ苦痛にあう子供達、そしてイラクやパレスチナの子供達！

6. (破滅への危惧)

私は、長年にわたり、危惧していた。20世紀の破滅の前兆のサインについて、おそらく、我々は、鉄器時代から抜け出ていない。しかし、詩篇は予兆し、恐怖を遠ざけてくれるのに役に立ち、尽くしてくれる。この課せられた務めには、今日 (こんにち)、かつてないほどの意義をもつ。

私は、絶えず思い出す。詩人ランボーの一節の決まり文句を：「恐怖政治はフランスのみにあらず」と。扇動者は、フランスの歴史を、1793年、ないがしろにする。そして、朽ち果てていく先頭者達よ、三色旗の叫びに、フランス大革命の徐々に拡大化していく「うねり」という木々の実りを崩壊させるために、別の風をもたらしこともなく。

「愛国心的な狂気・偽り」が、その収穫物を束にして捕らえた。もし、まるまる全部を我が物とすることができぬのなら、才能ある詩人が、先見者の自身の体験の穴 (活動の停滞期) に、恐れを認めている。なぜなら、恐怖政治は、現実の中で行使されているゆえに、このような激しい恐怖は、言葉によって表現されるからである。

7. (パレスチナの詩人、ダルウイチ1)

イスラエル人とパレスチナ人の間の紛争の中心へと陥った、ベイルートの所在地の証人ダルウイチ (Darwich: パレスチナの詩人) は、何度も牢獄を知ることとなった。今日 (こんにち)、まだ、彼は、ヨルダンのアンマンとパレスチナのラマールのどこかしらを尋ね歩いている。

彼は、光を待っている、暴力の行為を暴こうと、他の事を無視して、多数の人命を奪う破壊に憎しみをぶつけている。不意に、彼は、墓の穴ではなく、希望の穴を掘りたいと思う。イスラエル人とパレスチナ人とが、いつの日にか、一緒に、宣言することができるであろうに違いない、この言葉から、平和が湧き出るであろう。しかし、国境が、まだ、案山子の怪物のように、立ちただかっている。

地理と政治の強制力を、ものともしない、このような新しい「通用 (できる) 壁」に栄光あれ！ 脅威と崩壊にみちた我々の世界で、詩は、力を持つ。たとえ、一つの言語に根付くものであっても、希望のメッセージをもたらし為に、国境から地上へと言葉は飛んでいく。しかし、急がないと、なぜなら、希望は、もろく壊れやすいから。時には、重たい飛翔で、壊れてしまったり、死んでしまったりする、マハムッド・ダルウイチ (Mahmoud Darwich) が、「ガリラ

ヤの鳥（パレスチナ地方の）：Cf. ガリラヤのスペルはキリストと同じ」の死をみたように。

8.（ガザ地区への祈り，ダルウイチ2）

鉄剣を交えなくてはならないのか？ ダルウイチは、ガザ地区の人々の同胞達が平和に暮らしていた時をなつかしみ、人々を怯えさせたり追い散らかすために不当にやってきたのではなく、彼の受け入れがたい思いを叫ぶ：もし剣（戦い）で母からの大地をうばい取られたら、犠牲とその殺人者の中で条約協定に署名することはできないであろう；彼は国境（境界線）の移動に屈服することはできないであろう。（参照：聖書マタイ福音書26-32 剣をとるものは、みな剣で滅びる。Tous ceux qui prennent le glaive périront par le glaive.）

まず中核となる和合（協調）協定のないままの戦場での平和で、このマスカレード（仮面舞踏会・偽善行為）を、どうして受け入れることができようか？ ダルウイチは、強く望む平和への前提条件として敬意や（死者などへの）崇敬を大切に思い信じている人である。彼は、近親者の死の哀悼の単調な歌（調べ）を甘んじて受け入れることができず、平和の鳩、“我らの声の鳥”が解放され自由の身となる、言葉の力を信じている。

しかし問題は常に住む大地にある。その息遣いの内輪に、大地は、歓迎、欲待、特に謝意の中でしか、再び希望を見出すことはできない。大地の深い傷にも関わらず、大地はおのれに名を付ける術（すべ）を必ずや心得ているに違いない。それだから、田畑耕地の痛みは、（火）種の上に閉じられていくであろう。和解した人々の労働と水のみが、乾燥したこれら大地の歴史や顔（様相）を取り戻すことができるであろうから。

9.（ガザ地区の悲劇，ダルウイチ3）

ガザ地区の自分の家へ戻ると、子供の頃の村は破壊されていて、ダルウイチは、他所の場所に身を寄せることを余儀なくされ、Dayr al-Asad（ダイール アル・アサド）、次に Joleyde（ヨルイデ）、そして最後に海の近くの Haifa（ハイファ）へと移り住む。ほぼ簡素に住所（いどころ）を変えながら、しかし自身の祖国の中で、非難した者にとっては、この祖国からの追放は、さらにもっと辛いものとなる。

投獄、あるいは追放への恐怖から、彼が探し求め行き着いたのは、Adonis（アドニス）の様に、言葉の中に家を、詩の中に息吹を見出すことであった。彼は“Frontière”（国境・境界線）という言葉に、耐えがたき、新しい響きを与えた。希望期待への悲哀の前兆となる終焉をつける砲弾の鐘がなる大地。（参照：ヘミングウェイの「誰がために鐘はなる」：Pour qui sonne le glas.）もし逆境が回避されようと、少なくとも（とはいえ）、その影は常に存在し、そして彼につきまとう、かつて（フランスの詩人）アポリネールが愛の影に付きまといわれた様に。

追い出された亡命者のために、祖国はここに在るのではなく、他に在るのでもない；祖国は
“une corde a linge / Pour les mouchoirs du sang verse / A tout instant.” 絶えず /

血の付いた多くのハンカチゆえの / 物干し用ロープ / (の範囲) にだけにとどまり限られるのである。残像の裏で、国境線を垣間見る、このもう一つの張り巡らされたライン、地図の上に、死ぬまで有無を言わせぬ、一国の境界画定の決定をするのである。

10. (家族との別離, ダルウイチ4)

中東での、分離(仕切り)が起こるのは、子供時代を終わらせる1948年の最初の夜からであった。それは、ダルウイチにとって、イスラエル人の妻、リタとの間になされた分離(別れ)という、二重苦となる。血にまみれたこの大地での重苦しい(息の詰まる)、その分離は、海を越えたところで突然分別されることに決定され、痛ましい問題が残ったまま放っておかれている。分離することは、この大地に慣れ親しんだ人を見ずることへとつながるであろう。残るのは、無くなった祖国への思い出に、墓の場所の痕跡を留める印が、ひとかけらの石ころにしかすぎないのを意味するであろう。

分断された二つの存在(人)が、一つになって仲良く暮らすということは、不可能となり、まったく架空のこととなる。ああ悲しいかな、彼ら二人は離れたままで、お互いに孤独状態である。若い妻は、不在者へのメッセージを歌として送る。彼は、海の彼方の彼女に何年も、返事を返す。別れの時間が費やされていくのは、二重の離れ離れの暮らしと、二人の間に立ちほだかる本当の国境である。カップルが地上の楽園から追い立てられる国外追放(離れ離れ)の、もうけっして捉まえることができない、他の場所に消えてしまった。中世の古い地図には、ナイル川やガンジス川の水源地の合流地に、その存在を示していたにもかかわらず、(エデンの園は)より遠くへと消えてしまった。

妻のかわりなくして、彼は死と同様にもう詩人ではいられなかった。沈黙の斧が、リタの自発的出発のあとに崩れ落ちた。

11. (宗教とは, ダルウイチ5)

人生を語り、そして早急なる平和を呼びかけるマルムッド・ダルウイチあるいはアドニス(女神アフロディアに愛された美少年で、狩猟中に受けた傷が元で死すがその傷血跡からはアネモネの花が、女神アフロディアの涙からはバラが咲き乱れたという紀元前2世紀のギリシャの詩人ピオンの「アドニス悲歌」が語られている。)の声に、この傷ついた大地の向こう側(反対側)から、アラッド(Arad)の人里はなれた修道院にひきこもる、アモス・オズ(Amos: 聖書: 紀元前8世紀、12人のイスラエル預言者の一人で、イスラエル王国の滅亡を予言した人)のそれを(平和への叫びを)(今)おうむがえしに答えるだけである。

地図上の名前は、想像をかきたて、希望をよみがえらせる: ハドラマウト(Hadramaout: CF アフリカ北部にあった古代都市、現在のチェニアのスーヌあたりか。)は、南アラビア半島のどこかにある。平和への交渉という条件ならば、そこへ行くことが許される。

そこに何がみつかるであろうか？ 砂漠の中を変動するキツネの住処（すみか）であろうか？ 見捨てられ（廃墟となった）神殿（キリスト教、イスラム教以外の）であろうか？

16歳まで暮らし、戻り帰り着いたキブツ（Kibboutz：イスラエルでの共同農場）での親交ある、イスラエルの作家は、砂漠での危険を知り、孤独の窮地を告げ、他の場所でや他の人への開示を強く勧める。キブツでの楽天的であり安心感をあたえる論理は、人類の大問題を排除することを許さず、その上、小さな共同体の中での自閉（心のひだ）は、こりかたまった危険な内部者たちを除外することはない。彼の本、『どこか、たぶん』（Ailleurs, Peut-être）から40年が過ぎた。今日（こんにち）希望を言うためには、アモス・オズであれば、きっと他者に、まちがいなく、断言するであろう。これらが、最近、レバノンで息子を人質として捕まえられ、恐怖あるいは更に死から逃れる唯一の方法なのである。

12.（“和解”，ダルウイチ6）

つらいものであり、そして我々にとって大切なものは、東洋からきたこれらの声であるが、みせかけで和解することはできない！ マルモッド・ダルウイチのように、アモス・オズは情熱的に、パレスチナ人がイスラエル人に向き合えるようにと、もう一方の側の、パレスチナのイスラエル人に、開放的考えを公開していた。1967年の敗北のあと、アラブ社会は価値観の崩壊を信じていたが、その中で、ダルウイチは、彼の詩『白いゆり』（Les Lys Blancs）の中で、イスラエルの兵士に、兄弟のように仲良く言葉を交えていた。もっと最近では、戦争が新たに拡大した、パレスチナ人の激しい戦いの反撃の中で、新しい詩『戒厳令』が、フランスまで流通しており、そこで彼は、不条理を叫び、また彼の願いの唯一の“二国家共存”を唱えた。

（二国家共存）のそのかわりに、今日、パレスチナでは、仲間内での殺し合いの戦いにおそわれ、それに加えて不運にも、何人も抑えることができるとは思われない、身を焦がすほど憔悴した中で、多くの通りを軍地区として引き渡しているのである。つつしみ深く、礼儀正しく、無口でありながらも感じの良い、この人間に、私は胸がいっぱいになった。石との長い職人間から、ダルウイチは、ごつごつしたでこぼこや灼熱が残る中、いきている。

3. 「詩人リルケ」と「強制収容所」

さらに、「詩人リルケ」や「強制収容所」の悲惨さを綴りながらも、「平和へ思い」をつのらせている。

13.（死への恐怖）

傷は、我々の新たな誕生へと関わる時、実りあるものと成る。他の人生、他の姿、そしてイメージの本から飛び出した、重い荷物（負担）を軽くしてくれる。勝利とは結局、死への恐怖

を取り除き、なくすものである。

古い様式が我々に思い出させることは、我々が最低限の事柄を覚悟する瞬間にある。それは、我々に取り付きはしないが、思い出の時が我々の内に宿っている。不安の影がよぎり、我々がそのこと（不安の影）を認めるのは、死んだ者の尊い声を我々が認識できると信じているのと同様である。

14. (詩人リルケと彫刻家ロダン)

リルケ（詩人）はロダン（彫刻家）に心中を明かすため、Meudon（ミュドン）の彼の家にやってきて、学ぶためではなく、どのように生きなくてはいけないのかを教わるためであると胸の内をあきらかにする。仕事を続けながら、ロダンは簡素に答える。そして、そこから、リルケは彼の書記となり、アーティスト（芸術家）にとっては確かに、仕事をするということは、単にそれだけのことでなく、“C'est vivre sans mourir : 死ぬのではなく生きること”を理解するのである。

パリで彼が歩いているところを見かけたが、到着後まもなくで、長いマフラーを巻きつけ、痩せていて青白く、花盛りの青年というよりも、既にしぼんだ花のように生気がなかった。おそらく、ここまで、かなり軽快に一步前へ踏み出そうとしていたが、この弱弱しい青年は、ロシアの大荒草原やドイツの北の平原を通りすぎて来たのであった。仕事の美徳を褒めながら、石の硬さと向き合いながら創造者の実例を彼に伝え、ロダンは妄想を拒む方向へと促していく。偉大な彫刻家にとって、考えること（思考）は手仕事から出てくるのである。素材との接触を守りながら、素材との格闘をしながら、感覚を爆発させることなく素材を利用しながら、粘り強い意思を人生で絶えず、彼は見せるのである。

Meudon（ミュドン）時代の後、Biron（ピロン）館の人がやってきて、ヴァレンヌ通り（エリゼ宮の近く）やアンバリッド大通りの一角、その、中心部の一軒家にロダンは住むこととなる。そこで、（ロダンの代表作）「カレー（フランスの最大の港町）の市民」あるいは（ロダンの代表作）「地獄の門」に、出会うには、もう少しあとのこととなる。瓦礫の想像を絶するほどの塊と、錯綜した（入りこんだ）植物の散乱の間（はざま）に、薔薇の木が生えている。その、窓の隅の後ろに、リルケのランプが、夜中じゅう、灯り続けている。しばしば、彼はパリの人が行きかう夜の街をうろつき、時折、破滅的な笑い声を高らかにする怪しげな人物や、通りでの喧嘩で自分の犬をすぐに放り投げるような人物を見かけ、詩人の未開の部分に力説する、Cendrars（サンドラール；スイスの詩人1887-1961、世界各地で放浪生活を送り、いっさいの伝統的形式に反抗した詩人、作家）のことを、思い描いていた。

何年かの後、リルケは Duino（ドウィノ）に居り、そこは、Trieste（トリエステ）の北の、神の子供を彼の中に見出した彼の擁護者、la princesse Marie de la Tour et Taxis（王妃 マリー・ド・ラ トウールと侍従）の館である。彼は彼女にパリで出会い、ヴァレンヌ通りの椿

円形の彼の部屋から、たくさんの手紙を彼女に書いた。彼が、高い断崖の上にある、海辺の彼女のお城での滞在をとて待ち望んでいたのは、なぜなら、（ロダンの住む）ピロン館は彼にとって不安をかきたてる家となり、そこでは、ロダンのかなり強烈な人格の下で息苦しい恐れを感じていたからである。彼（ロダン）の下を去り、海のうねりのある田舎での、高地で爽やかに息づくことを熱望したのである。

15.（詩人リルケ）

リルケは、別の側面から来る、遠くからの何かしらに期待する。革命、すなわち、別の人生の始まりである。そのことを彼は準備していて、Munich（ムニシュ）からやって来て、クリスマスの前日、Duino（ドウィノ）に到着する。王妃は不在である。彼女はベニス（イタリア）に出かけなくてはならなかったのだ。新たな孤独の中で、壮大な装飾の中で、アドリア海のほとりで、彼は“Elegies de Duino：ドウィノでのエレジー”の初版を作成するが、それは彼の新たな詩作を行う険しい出発点である。リルケは、この最初のエレジーの冒頭に、もはや衝撃を与えるのではなく、疑問を投げかけている：Qui, si je criais, qui donc entendrait mon cris parmi les hierarchies / des anges? もし私が叫ぶとしたら、天使の序列の中で私の叫びを聞いてくれるのは、誰であろうか？

広大なスペース（空間）に、この叫びは終わりのなき静寂の中で失われていく。リルケは、彼がこの疑問の呼びかけに彼自身でまるで答えたかのように、恐ろしい天使の中にその前兆のサインを見るか、あるいは、むしろまだ未完成の世界に点在する天上的なものの証を見る。沈黙ゆえの、おそらく美しさゆえの恐ろしさ、この様相は、なぜなら、すべてが待たされ（期待されて）いる状態にあるべき、将来の神の到来を告げている様にも思われるからである：最悪のこと、そして、間違いなく（確かに）最もよいこと。かくも危険であり、かくも過剰な奇跡であるのは：言葉のひらめきの中にある詩である。

この天使に対して、リルケは、ヤコブ（聖書の聖人）のように、戦いを始めるつもりではなかった。彼はインスピレーションにより強い感銘を受け、彼は自分自身以上の声により自分に宿っているものを感じるのである。風が揺り動かす茂みのように、もはや物音もしない。まさに人類を脇に残したまま、神話によれば、Orphee（オルフェウス／オルペウス：詩人で竖琴の名手）に対して、そうであったかのように、詩に対して心を引きつける本能的な直感でより以上のものができあがるのである。

識別できる本当のサイン（証）は出来事であり、樹木であり、道であり、同様に奇跡的のように（称賛で）執り行われるであろう押し黙ったそして具体的な行いの出現である。詩人はその時、自信を持って、時の中へと“patrie du dicible”言い表すことのできる祖国（国際社会の中で認定されている）へと立ち入る。それは、存在するために、より満たされた、より開かれた、生存のために不可欠なエネルギーの回帰である。言葉の詩情あふれる使い方が可能にす

るのは、計り知れないものを払いのけるのではないにしても、少なくとも抵抗する力を対置させ、人間が言葉使い（言語活動）の気品を持つとき人間がその“Detenteur” デタンツール（保持者・所有者）となる魅力を可能にするからである。

16. (プリモ・ルヴィの証言：アウシュビッツ1)

Shoah（ソア）での夜であった。火葬炉から高くのぼる煙があつきたれこめて、重苦しい夜であった。勇気と恐れ、静けさと叫びの夜。我々は夜明けとなる幸運に恵まれているが、たとえ暗がりも人工光線に交じり合っている、忘れられないいつまでも心に残る教訓がある。

収容所は、人間の共同体にとってもっとも非道の夜が昼にある、夜の裏側、夜の地獄である。そこにいる人間は、自らに己自身が悪となる。さんざんたる被害の広がり、消せない傷跡、繰り返される脅迫観念に気づく前に、この世の地獄へと招きいれられた。人間性と非人間性、生と死の間（はざま）の境界がはけてかすみ、かつ、廃止傾向へと向かう、恐怖のこの世界で、より深みへと入り組んでいくことを可能にしたのが、最近追悼の記念式典がおこなわれたアウシュビッツ（第二次世界大戦中のヒトラー政権下での強制収容所）であった。生き延びるという望みは、拘留された人達にとって、この様に抹殺されるか、生きる権利を否定されるかの状態にあることからの拒絶であった。たとえ恐怖で話すことが不可能になっていたとしても、たとえ極度な苦しみにあったとしても、沈黙を課せられたかのように、人が外へと連れ出された証を、何としても（是が非でも）、もたらすことであった。

しかしながら何人かの人達は、衝撃的な方法で、Primo Levi（プリモ・ルヴィ）のように、語ったり、書き残したりもした。Turin（トリン）で生まれた、この化学者にとっては、彼の実験室の閉ざされたスペースが、彼自身の国の中でのナチズムやファシズムの台頭、次なる抵抗運動、想像もつかないことを生じさせた拘留と強制収容のさなか、25歳まで彼を擁護していた。彼は言葉で説明したいと願う。ムッソリーニ派の警官により検挙され（捕まえられ）、そしてアウシュビッツ強制収容所へ送られ、彼は、収容所の第三セクターのゴム工場のある、Buna（ブナ）の実験室に配属された。病となり、約2万人の他の強制収容者達と共に、ソビエト軍に開放されるまで、凍てつく道を悲惨に病に耐えて身をひきずりながら退去させられ、そして、東ヨーロッパの9ヶ月に及ぶ流浪の果てに、彼の祖国へと戻ることができた。

どのように、これら全てのことを説明できようか、非人間化された世界からのこの奇跡の帰還を？ プリモ・ルヴィは、収容所の青白い光や暗がりの中で消えていった（死んでいった）彼の仲間たちの顔を思いだす。彼は、長くは生き続けられないだろうからと差し迫っていたのは、なぜなら、アウシュビッツで重い病にかかり、かなりやつれはてていたからである。生き残りの生存者であることが、彼が最も重要な目撃者（証人）となることであり、更にそれでもなお彼の言葉によって必ずや欠落部分をおぎなえると知っていたからである（心得ていたからであ

る）。絶対的目撃者（証人）というものは、まさに、もう語ることが出来ない人であろう、そして、その人の死させも、まったく穢（けがれ）れなき軌跡であったかのようにである。

17. (プリモ・ルヴィの証言：アウシュビッツ2)

この苦悩の裏には、どのような秘密があるのであろうか？ プリモ・ルヴィは、『私は人間を恐れている（J'ai peur des hommes.）』で、こう告白する。この書により、彼はまだ存在していること（生きていること）をそして語りたいことを試みたいと思い、口に出せないほど酷い事が隠れて存在していた黒い穴に近づきたいと思う。しかし、どのようにしてこの沈黙の壁を乗り越え、影の民族（ユダヤ人達）を払いのけることができようか、生き残った者が自身の記憶に苛まれ、生き残ったことに自身を咎め、これら行方不明者達（死者達）に取り付かれている時に。努力が空しいのは、なぜなら、かつて飢えていた人達が、（うさぎやねずみ等の）牙をもった動物と化すや、己自身もその一員となることである。（Shoah）ソーアの時代が、この様にかつての脅迫観念を具現化し、あるいは、消滅させられていた夥しい影に没頭していく。

停戦、アウシュビッツからの生存者の、遅れたそして辛い解放の話は、傲慢な秩序（治安）の、ポーランドで「(Wstawac) 立ち上がれ！」という反響をなす、一篇の詩を通じ、広がっていく。自分の仲間達の中で、彼の帰還により、歴史をもう一度読み返す必要がある。彼らはそこにいて、テーブルを囲み、食事をするが、心ならずとも神童のように、もう彼らの食事を分け与えるのを待つことのない人を招かなくてはならない。再会に歓喜はない。かなり元気に、生きていた家族と共に、それを本当だと感じる事ができない。新たな夢の内側にも悪夢が取り付いている。恐れが続いている。自己に関して絶えず考え、脅迫観念にひどく苦しめられている。そして、この脅迫観念は、詩の冒頭にあるように、言葉でつるされた、アウシュビッツの夜明けを共にしてきた秩序（治安）にある。

長い間、この様に消え（死んでいった）仲間達の全ての人の顔をまだ思い続けているが、だからといって、もはや一人ではない。夜は、夜明けに、日が明けるほどに、消えうせていく、あるいは、全てが同じ霧の中にまだ包まれているのかもしれない。偽りの眠りにある者の顔は、夜間勤務をしている者の顔は、死の色をしている。不安というものは、しかしながら、確かに、心ならずとも生き延びる幸運に恵まれる、あるいは不運である人に対してでもあるが、加害者（虐待者）達にたいしての、不満の種を、絶えず思い浮かべていたように、これら死者達の口を動かしているのである。

ダンテ（イタリアの詩人、1265-1321、『神曲』の作者でその第一部が「地獄篇」）の「地獄篇」の終わりなき夜を収容所に投影していた、プリモ・ルヴィは、消えることのないはずの夜明けを、ある日、ついに恐れるようになった。残酷さの時の後、復讐の時というものは、永遠に、

報復(仕返し)と罰への方向へと心が引き付けられていく。トリノ(イタリアの北西部の都市)でエスカレータの箱に身を投じた彼は、不幸の糸を断とうとするためであったのか、あるいは、まだ生きていることで彼を咎めていた人達の灰色の顔色と一緒になりたかったのであろうか？

18. (エルサレム)

回想録は、テキストの中にあるいは大理石の中に書かれた文字で意思を、記憶の純粋な仕事に置き換える傾向にある。パスカルは、彼の『回想録』のテキストを彼の服の裏地に身に付けていた(着ていた)が、それは、彼の改宗の夜に創作された、火の印で作られた叙情詩的なナリグラム(詩句の配置がものの形になった詩)であった。

エルサレム(イスラエルの首都でユダヤ教、キリスト教、イスラム教の共通の聖地)の強制収容の記念碑を訪れて、私は、子供たちのデッサンのほとぼしり(ひらめき)を、保存された文字から発する不思議な力にとらわれた。人間と対する証が、もし恐ろしいほどの告発者であるとしても、無垢な人の光線でフィルターのように和らげられる時、人間のためへの証へと回帰するのである。

19. (絶滅収容所)

貧困が恐怖を生み、とりわけ消耗した衰弱状態と背中合わせの時には、そうである。それは、身体の衰えの印であるが、この枯渇が、老齢によるものであれ、あるいは病気によるものであれ、あるいは絶滅収容所(ナチスによるユダヤ人殺戮のための特別収容所)の人々の殉死によるものであれ、私がこれらのイメージに捉われずにはいられないのは、アルベルト・ジャコメッチが描く、何処へいくかも知らず、近親者であれ単独者であれ、いずれの人達も、手足を長く伸ばしきって歩くシルエットの様だからである。それは、あらゆる基準が失われた様に思われる空っぽの世界で、幾人もの人達の孤独の身の毛もよだつ輪舞(周回)のようである。一種の線上の骨組みに縮小された存在となった人間にあっては、虚無に瀕した芸術家によって居場所を与えられたように思える、限りなく悲壮な何かがあるからだ。それと同様に、ジャコメッチが彼の兄(弟)ディエゴ、あるいは彼の妻アネットの肖像画を作りたいと思った時、彼は恐怖にとりつかれた、啞然とした(sidereは、ギリシャ語のsider「星」ユダヤ人の印に服の胸に使われたスベルと同じ。杉山メモ)顔つきを表した。

彼は無重力を覆し、粘土(板)や石膏、あるいはブロンズ(青銅)を通して新しい発信基地を静止と躍動の間(はざま)で、アテネ(ギリシャ)のデイスコポロス(円盤を投げる人:古代ギリシャ・オリンピックでの勇士)のイメージで、高揚の中でのバランスの視点、息づかいの中の苦痛と至福の視点を考え出すのである。投影された人物像が交差し、人間は沈黙のままよろめいて乱れ、その顔つきは題材の形を成していないものから少しづつ苦勞して出され、空中に浮かんだ猫、道を歩き続ける犬、夜明けのためのよりどころとなる(避難所)の、天井の

あげ戸からや、屋内の地下室から、全ての人が生きて出てきて、精神の抵抗を証言するのである。

グラウビュンデン（スイス東部の州、ロマンス語圏で1395年の反ハブスブルグ同盟にならうこの地方の住民で、ラテン語の「年老いた、古くから居る」に由来する）の彼の出生地から遠く離れて、彼は、秘められた、神秘的な、辛い、人生を歩み続けながら、素手で作品を作るのである。14区の暗い洞窟の中で、アルベルトは、自らの戦いに身をゆだね、時には、まさに戦闘真っ只中の大地にしながら、自分の彫刻作品にうずまり、眠ることさえある。彼の闇から出て一度は光輝くこれらの人影を、目に見える世界の素材として、粘土をこねる彼の指から湧き出すただ一つの奇跡だけを待ちながら、彼はこの一時的な野営住まいに満足していた。

20.（危惧から平和へ）

私にとって、希望は、季節の移ろいの中、生と死の連鎖、人生そのものに結び付けられている。私の危惧は、この前の終焉（第二次世界大戦の末路）の危惧よりも、「通じている道が何処にもない」（des chemins qui ne menent nulle part. CF. Tous les chemin menent A Rome. すべての道はローマに通じる）ことである。私は、人間が火を考え出したのは、食べものを焼くため、あるいは、洞穴生活での寒さを和らげるためではなく、闇の中で、よりよい道（進路手段）を探すためであると、信じたい。

夜明けを熱望する人達と共に、私がインドで過ごした年月から私の中に住み着いているこの東洋へ向けて、今日歩みを進めたい。そこには、死が、至る所、いつでも存在するが、しかし、深い喜びの夜明けを生まれさせる為には、シンプルなマッチ棒で充分である。それぞれの死が、肉体への信者との距離を縮めるのであり、ついには半透明となり、ついには光に混ざり合った、静寂と幻惑へと近づくのである。

ランボーは、『地獄の季節』（ランボーの散文詩集の題名）の終わりに、西洋の泥沼を避けて、この地上でのステックス（Styx：ギリシャ神話で冥界を7巻して流れる川）である彼の心を捉える東洋へと向かう意向を表明するが、よきにつけ悪しくにつけ（良い時も悪い時も）彼の晩年の心を燃え立たせるものと成ったでしょう。それにも関わらず、それは、彼が探し求めている、新たな生き方の兆しである炎ではなかった。なぜなら、それぞれの人間には、たくさんの人生が密生しているように、彼には思えたからで、この新たな生き方を、その時まで彼が生きてきた様々な人生に、彼は付け加えたいと思った。（からだ）

21.（内なる移住：フレドリッヒ・ホールデルリンの場合1）

19世紀のイメージされる東洋は、今日、我々が目にする東洋ではなく、まさに、希望の火花が、そこで、輝いて燃えている様に映っていた。ギリシャは、望郷（ノスタルジー）に取り付

かれたこの東洋の幻想への部屋のエントランスホール（玄関口）をなしていた。アレキサンドリア（エジプト）へ行くために、ジェノバ（イタリア）で船に乗る前でさえも、そこからキプロス（地中海に浮かぶ島国家）へ、次にキプロスからアデン（Aden）へと、（詩人）ランボーは、エーゲ海の島にたどり着くために、歩いてイタリアを横断しようと試みた。ネルヴァル（1808-1855 ロマン派末期のフランス人作家）は、キュテラ島（ギリシャ南部、ペロポネリス半島とクレタ島の間にある島で、詩語では、比喩的に「恋の島」の意味で用いる）の沖合いに立ち寄ったが、失望を恐れながらも、そこに、期待を寄せていたに違いなかった。

しかし、フレドリッヒ・ホルデルリン以上に、ギリシャに魅了された人は、誰もいなかった。彼は、自分が生まれたかっただと思う地、ヘラス（ギリシャ、エーゲ海とピンドス山脈の間にある古代ギリシャの一地域で、後に、全ギリシャを指す名称となった。）の故国、ゲルマニア王国（古代ローマ時代の地名ではライン川東部を指し、東フランク王国がヴェルダン条約によって3分別されてできた国の一つをゲルマニア王国（843-911）と呼んだが、この地域が今日のドイツのもとになっている。）へ移住したいと夢見ていた。この希望から、引き出されたのが、「イペリオン（Hyperion：ギリシャ語起源「最高」の意味）」という、移住の聖歌である。この詩人は、彼の故郷、シュワーベン地方（西ドイツ、南西部の地方）を旅立った当初から早くも、そこに、加護を祈るのである。しかし、既に、彼の想像力は、スイスのアルプス山脈へと、そして、そこからロンバルディア（イタリア北部の州で、北はスイスに接し、州都はミラノである。）へと、飛び立っていくのである。ゲーテ（ドイツの詩人、作家）の『かわいい子娘：la petite Mignon』や、ネルヴァルによっても有名なイタリア、そこはまるで花盛りのレモンの国の様である。光輝くギリシャへと（彼の想像力はさらに飛んでいく）。東洋へと、そして、コーカサス山脈（旧ソ連の黒海からカスピ海に走る山脈）まで、さらに、人目に付かぬ影なる居所を探し求めて、インカ人の居心地の良いこの海の方角へと、自分の居場所を回帰させるのである。この旅路、そして、この出会いで導かれたのは、ヘラス（ギリシャ）の恩恵を経て、真の詩的住まいの館を確立した証である。なぜなら、人間の夢というものは、全てに存在するが、同時に、そのすべての上を目指し存在する心にあるからだ。おのれ自身を捜し求めるためには、あらゆる国外追放よりも、もっと、この内なる移住に、私は利点があると信じている。

ホルデルリンの視点（世界観）は、自分の居所を、生きている者達や死者達を愛で照らすことが出来る光の様にたたえられる、ディオチマ（Diotima）の人物像に見出すことである。フランクフルトの銀行家と結婚し、ホルデルリンが家庭教師であった娘の母であり、愛されていた女性、スーゼット・ゴンタール（Suzette Gontard）の死は、ネルヴァルにとってのジェニー・コロンの死と同様であったにちがいない。しかし、ホルデルリンがこの消息を知った時には、イペリオン（Hyperion）が既に書かれており、一部は出版されていた。ショックが狂

気への入り口へと彼を突き落としていった。

プラトン（前428-前348、ギリシャの哲学者）のデイオチマの人物像、マンティネア（Mantinea：古代ギリシャの南部、アルカディアの都市）の外国人女性、（それらが）スーゼット・ゴンダールの人物像と一体となり、さらに崇高なものへと昇華させたのであろう。彼女が、キリストに結びつけられた特異な人である最後の偉大な讃歌のオリジナル（由来）である。奇妙なことに、イペリオンの中で、デイオチマを死なせたスーゼット・ゴンダールに対して、ホールデルリンはわびていた（あやまっていた）。本の一般的配列が、必要としたものであったが、なぜなら、彼の友人ベラルマン（Bellarmin）の解説の様に、彼自身の理想が、死すべき者への従順、共有を必要と考えていたからである。

ホールデルリンが、西洋からの人間の新たな叫びで作成表明したギリシャの大地を鮮やかな理性で掘り下げている。彼は、彼の夢を根付かせ、（西洋の人間に）どこにでもいる冷やかな恐ろしい人達に（彼の夢を）見捨てることなく、人間の尺度を与えようとする。今日、まだ、この叫びは、警鐘をならしているが、その尺度が、人間の歩みに指南をうながした。

22.（世界の夜明けへ）

山々の山頂を越えて、東洋と西洋の道半ばで、私は混ざり合った風景の無限に広がる光輝く島を追い求める。他の場所の、更にその向こうにある、そよ風の垣間見られた、この場所は、ザオ・ウキー（Zao Wou-Ki）のまさに息吹の場所である。そこでは、両目が大きく見開かれ、酸素不足に順応するための呼吸に時が必要であり、この様な高地で、気腫の耳鳴りを、忘れるための耳にも時が必要である。おぼろげに見えるものはほとんどないが、しかしながら、キャンパスの端から端まで、その軌跡がそこにある。そのまなざしに差し込んでくるのは、光に照らされた絶壁の影の斜面から、色鮮やかな一色塗りの（眼下に広がる）感動する景色である。クレー（スイスの画家1879-1940）のささやきやセザンヌ（フランスの画家1839-1906）のゆらめきが、そこには通っていた。雲は古（いにしえ）の姿（人物像）を重厚にし、魂の風は海へと追いやるのである。故郷は消え去り、（親しい土地から離れて暮らす）流浪も望郷（ノスタルジー）も同じく消え去るのである。もう一つの航海が始まり、私が思い描くのは、もう一方の岸にある山頂や海溝（渦潮）についてである。それは人間の叫び声が埋没する大きな外海の別のスペース（場所）である。世界の新しい夜明けは、賢人の筆のもとに、顔を輝かせる様なかじとりの太古からの動きの中に現れる。

23.（パリ、芸術家達の思い）

何度、私はサン＝ジェルマン＝アン＝レー（パリ西郊の郡庁所在地、パリ7800地区）までの道を進み、キジノ（Kijno）、熱血漢のラド（Lad）、用心深いマルー（Malou）のもとを（訪れたことか）、つねに焚かれ続ける蒔きの火の前で、大いに駆り立てられたその白熱（の興奮状

態)を(心に)重く刻みながらも和らげる、絵画、哲学、詩(の講演)に拍手がぱちぱちと起こるこの生き生きとした発祥地まで、(の道に私は何度も足を運んだのである。)雷のような声で、苛立ったり、あざ笑ったり、(あるいは)朗々と詩を読み上げたり、毒舌で、ののしったりと、キジノは世界の秩序を覆すのである。

私は、そこの上の、屋根裏部屋で、イーゼルと仕事台と絵の具の真中にうずくまる、彼(キジノ)を見たが、(彼は)その熱気の中、ランボー(1854-1891フランス象徴主義の詩人)や、アルトー(1896-1948フランスの詩人・演劇人)や、アラゴン(1897-1982フランスのシュウレアリストの詩人・小説家)の顔(面影)を、しわくちゃになった紙から浮かび現せたりしたり；イラクで死んだ子供たちの悪夢に突然白黒で襲われるのを追い払おうとしたり；昨日からも今日も(続く)、加害者(虐待者)達の残酷さを告げるために、キャンバスを引き裂いたり、捻じ曲げたりしたり；柳(Saussaie：古い地名、林・柳)通りの独房の中で、拷問にかけられていたレジスタンス運動家達の落書きと言葉を永遠(永久)に刻んだりするのであった。それはまるで、とても激しいこの辛さを耐えるために、それを(この辛さを)(血の色の)赤い絵の具で断ち切るためにたどり着いたかの様である。

つねに、この優しさ、この同胞愛を、果敢にも勇気を奮って遠くまで彼の思いの網(ネット)を投げかけようとする彼であるが、人は一人だけで救うことが出来ないのを(彼は)知っている。政治的闘志達、レジスタンス達、あらゆる沿岸地域の仲間達に囲まれて、彼は、終わりのない繰り返される試練に、己(おのれ)の才(という献身)で前へと突き進むのである。

24. (苦行)

キジノと同様に、十字架の道(キリストが十字架を背負って歩いた苦難の道を歩む苦行)の同じような高揚の中で、私はロベルト・コンバ(Robert Combat)の答えのない質問に触発された。重なり合う絵の背景に、彼は子供時代の波乱万丈の出来事を重ねていたのだが、自分の(万年)筆を思うがままに共産党のビラに走らせることが出来た時なので、セート(南フランス、モンペリエ南西方の港湾都市、地中海沿岸のフランス第一の漁港)の父親に(それを)配り、ドゥブフェット(Dubuffet)やピカソ(1881-1973スペインの画家・彫刻家・陶芸家)のデッサン画にも勇気付けられていた。彼は、ためらうことなく心の鍵を鏡の向こう側まで探し求めに行くのであった。

「ウサギの畜殺(惨殺)」(“Le Tuage du Lapin”)は、死に至らず、初歩の、残忍な行為を成す、彼の祖母を表している；背中から見ていた子供時代、イチジクの木の脇で、流れ出す血に怯えながらじっと見つめ、怪しい人物のように、近くから見ようとそこに、忍び込むが植物の立ち木が幕となり目を遮った。野原や低い石垣の中でも、怒り狂ったり、隠れたりする、モンスター(怪物)を、やがて片目でも見分けることができる。遠くに、ポール・ヴァレリー(1871-1945フランスの詩人・思想家で20世紀前半のヨーロッパの知性を代表する)の暗示する、

地中海沿岸の海の墓場（墓標）が見えている。明白な事実についての、その場面は、短編映画の様に、彼の心奥底に刻まれていて、子供時代には、もっと後になるまでの長い間（その場面の詳細を）理解することはできないであろう。神秘は別の絵の中でまた繰り返されるが、1991年作の「花咲ける森の中の自閉症の人」（“L'Autiste dans la foret des fleurs”）という（タイトル画の中で）、田園を讃（たた）える王として自分の兄（弟）を描くが、（その姿は）苦悩しながら森羅万象の広大な花々の真ん中に立つ姿であった。「既に、彼のカレンダーから冬と秋を削除すること」を、告げていたのである。

25.（夜明け）

大気と光が、明かりを灯した夜に連なる夜明けに、不思議で比類なき混合物を形づくる。昏と、夜間の視界でじりじりした両目に、疲労感をにじませて、眠気眼の通りの道筋では、再び勝ち取った自由のように、自己の意思による“眠れぬ時間”からの自由がある。

26.（人間を信じる）

私は、夢を無くした如何なる国のユートピアも諦めるつもりはない。私は、この住まい（住居）、人間を、そして、さらには今以上の詩的住まい、人間を、信じる。私は、この善意の義援金を信じ、まだ存在していないが何かを実現するため、この我々自身の力により、それを生じさせなければならないと信じている。私は、生者も死者も（影響し）相伴って息が合うような（共生しあう）（世界の実現を）信じている。

27.（オーストリアの詩人：インゲボルグ・バークマン）

現代詩人の如何なる人においても、インゲボルグ・バークマンほど、詩心を目的とする追求によりわかりやすく明示をしてくれる者はいない。オーストリア生まれのこの若き少女は、ヒトラーが彼女の町、クラゲンフルトへ侵入して来た時、恐怖を体験した。彼女は、ナチスが、女、子供、すべての人に通達した「穴を掘る命令」に抵抗した。彼女が選んだのは、彼女が言うには、太陽のもとで死ぬことのほうであった。

戦争の終わりに、彼女は、「“Felician”（祝福者）への手紙」を書く。見知らぬ青年が、彼女の夢の中でしか他には存在しない幸せの名をもたらし、彼女がその手紙の中に掲載したのは、彼女が待ち望み、詩篇を利用して心に浮かんだ創作に映したオーロラ（夜明けの曙）のシンボルである。最初に、彼女は、この狂気の時代の悪臭を浄化させる、夜明けの凍える大気の中で、目を覚ます。彼女は、愛するものへ自分を取り戻させる、晴れやかな一日を満喫する。同時に彼女は、湖、砂漠のことを考える。それは、もう、失われたものではなく、新たな人生を再生する場だ。音楽愛好家の彼女は、湖のみなもに、「音符（手記）の流れ」を結ぶ。そして静寂の中で、死者は口を閉ざすと彼女は思うのである。“Felician”（祝福者）は、空想上の存在に

すぎない。しかしながら、その名前（Felician）は、彼女の言葉のこだま（反映）と同様に、戦争をたどり思い出したあの夏の、インゲボルグにたどり着く。彼女はこの光を軽くかすめるバイオリンの弦の振動のように称える。

自身の作品や、ましてや自身の人生において、すべてが光輝くことはない。“Celan”に見捨てられ、“Frisch”に裏切られ、彼女はローマ時代の古アパートで、戦火の中死ぬまで家に閉じこもっていた。しかし、幸福への挫折やオーストリアのあまりにも少なくなった言語表現の追い討ちの世界の衰退に、心底からの深い拒絶の意思が彼女には残っている。

出生地カラントイ（Carinthie）で、インゲボルグ・バークマンは、ついにユートピアの彫像を生み出した。どこにでもいいといった国ではなく、可能な限りのそして異国であったとしても開かれた大地にである。世界中の、あるいは世界を飛び出しての旅への薦めなどいささかも必要としない。それは、愛された国、扱われた（えらばれた）国、第二の祖国となる国、への移住である。もう一度（再び）、地球世界に希望を持ち、そして信じるために彼女は海のはずれに彼女の（自由で気ままな）ボヘミアンを思い描いた。そこに、その浜辺に、すべての移住者達を、すべてのさまよえる民達を、世界各地で何の確証もないが、しかしまだ信じ人生に希望を持つすべての人達を、彼女は呼び寄せることが出来る。彼女の終（つい）なるメッセージは、希望へのメッセージというだけでなく、普遍性のメッセージでもある。海のはずれのボヘミアンは、我々誰しもが、人それぞれの中にあるものである。

28. (オーストリアの詩人：トーマス・ベンハート)

帝政の崩壊は、過去にはあえて向き合わないという古いヨーロッパの国々にとって危険性をもたらすことを示している。戦後のオーストリアには、苦しみや積み重なる遺恨を表わした沢山の作家達がおり、たとえばトーマス・ベンハートは、小市民階級（下級公務員等）でありながら身を危うくする言動である呪いの言葉を用いていたが、エルフリード・ユリネックの辛辣な密告により、穏やかで静かなアルプス山脈が脅威に満ちた殺戮の場に色取られることとなる。この様な（本能を）押し殺したような悪夢は、一度ならずとも繰り返された。今日（こんにち）、ヨーロッパ全てが、同じような悪病に感染しているように思われ、すなわち、その（前兆なる）症状の表れが、民衆主義（1930年代にあった）、外国人排他、自らの殻に閉じこもる内向性である。時を超え、歴史を越えての平穏（安らぎ）への夢は、酸負した（すえた）希望へと再び戻ってしまった。未来の希望は、おのれ自身の明晰（明瞭）な視野の中にしかない。

4. 「眠れぬ館」

最後にド・ヴィルパン氏がエリゼ宮で毎夜思考した世界を紹介してみたい。

（「眠れぬ館」にて1）

遺体登録簿をつけることが、何の役に立つのか？ 戦火の薔薇の花が血に染まり普通の薔薇の花であるかの様に、日常的に（毎日）悪の花が咲く。価値観の奇妙な逆転により、表面的で、急ぎすぎる、つかの間の（はかない）魅惑を味わいながらも、このいつもの領土へ追いやられた恐怖も味わっている。

もう一方で、そこには、長旅の間だけでなく、すぐに我々には決して見せない真実の顔が待ち構えている。「美（美しさ）とは恐怖の始まりのほか何ものでもない。」と、リルケが断言している様に、我々自身の危機に、我々それぞれが巻き込まれている存在の深みにあつては、革命が優先される。根深く変化した状態ではないと、どのように想像できようか？

恐怖に対して“この眠れぬ館”の手記（私記）を通して、私は我々の戦いの場を再び訪れたく思った。そこには続く悪夢があり、眠りや忘却で取り払うことができたと思う。もしそれが救いの炎でなければ、我々の闇の戦いでその時、何が残ろうか？

（「眠れぬ館」にて2）

この手記（私記）は抵抗の冊子となってここにある。私は政治（だけ）で我々自身から我々を救うことが出来る助けになるとは思わない。悲劇の行動へと駆り立てる棘とげしい私的な思いを鏡のように映すとりこになった人々にとっては、力（権力）が夢想（CF. 夢想のスペルは、ギリシャ神話の怪物（ライオンの頭、ヤギの胴、蛇の尾、口から火を吐く）と同じ）を抱かせる人達を増やしていく。そして、もし権力者が、意識の崩壊、魂の否定を押し付けるなら、：うぬぼれ（むなしさ）への称賛、もろい（すぐに崩れやすい）凱旋勝利、これらすべてがフランスではない。夜のしじまに、これらのページを通して語ることに、精魂を込めて、こう言おう：まだ人民を守れる索はあると。

我々は、我々自身の生命、我々の協同生活、我々の自由、我々の自尊心、我々の独立、が危険にさらされている暗い影を落とす新たな時代へと入り込んでいる。未来は我々の要望に（宿るので）ある。

（「眠れぬ館」にて3：生きる人生へ向けて）

手にランプを提げた夜警の人が通り過ぎると直ぐ様に、別の季節労働者達がやってくるのを私は知っている。“眠れぬ時間”（不眠）は、こうしたある人達に限られたことなく、全ての人達の課題（務め、義務）である。我々が住むいくつかの場所での記憶のごとく、我々の心を締め付けるがごとく押しつぶし、我々の責務を強いている。

何人にも時（時代）は分らず、何人にも最後の橋（わたしの仲介）は分らない。それだから、自身を引き出そう、外海に身を投じよう、自分の顔を（砂のような）辛辣さに晒そう。私は恐れない。ここで、大きくなった内なる言葉の前に、泡（あく、又は：cf “人間社会のかす”と

同じ単語)は衰退していき、泡は散り散りとなっていく。空や風と共に、生きる別の(もう一つの)人生があるからだ。

おわりに

アメリカの単独「イラク戦争」に始まり、世界平和への音が、増すます、崩れかけてきている現状に思える。氏の著作は、その意味で、今もまさに、警鐘をならし、「平和への絆」を信じ続けて教育と詩歌で戦っていく姿勢の指標と思える。そして、原爆、福島事故のあった日本だからこそ、「平和への絆」をペンで祈っている。